

はじめに

であったであろう。戦後の工場用地化と宅地化が進行するなかで、現在では用水路の多くは暗渠化し、そのうえを道路が走っている。堤防付近は海拔5mほどだが、市域全体がほぼ海拔2mの低地である。

本稿では、中川低地一帯の地理的特徴、近世来の河川改修、新田開発、それらと関連する街道管理、及び独特の神社の配置に着目して、八潮市域の近代以前の基本構造をスケッチする。それらは、この地域における近代化の過程の社会的歴史的個性を条件づけていると想定されるからである。なお本稿での記述資料やデータは、主に『八潮市史 通史編Ⅰ』（1989年）（以下市史通史編Ⅰと略記）に依拠した。



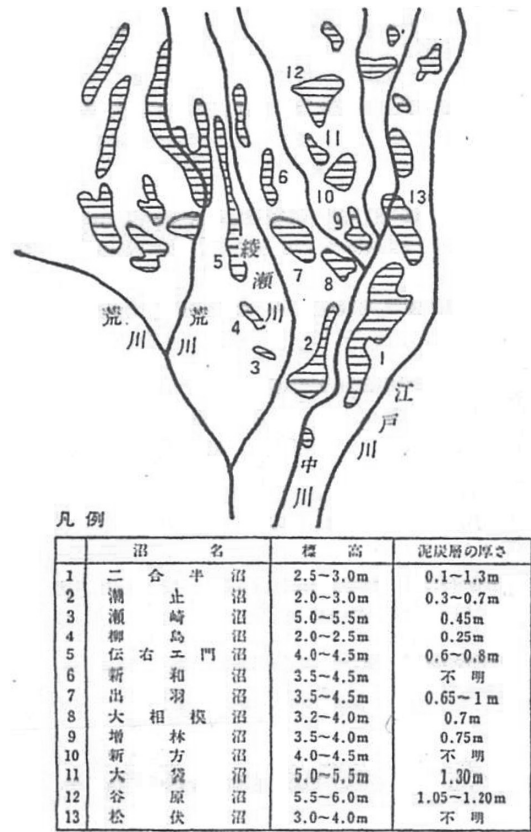
図0 埼玉県東南部5市1町と川

1 中川と中川低地

「中川」という呼称は、「古利根川が綾瀬川を合流して東京都内に入ったところあたりからの呼称」であったが、「昭和5年頃かつて末流が江戸川に合流していた庄内古川が越谷の東部で古利根川と合流するように改修されてからは合流以後の下流を含めて庄内古川を中川と呼称するようになった」という。

中川流域は、豊富な水量をもつ河川の影響下にあり、これまでの度重なる水害の激しさ―河川の蛇行と沼沢地の痕跡、厚く堆積した氾濫土などを推測することは難くない。このため幾度となく河川の改修が行われ、その制御に意をくだいてきた。とくに江戸期の改修は大規模で、江戸下町の本所・深川を水害から守り、広い中川流域を食糧供給地として開発するなどの困難な作業が行われた。文禄3年(1594)の改修は利根川現河道に当たっている派川を幹流とし、それまで幹流であった会の川と合の川の二川を締め切ったのである。幹流となった川は現在の川筋を流れ、加須市東部で会の川の下流に合流した。渡良瀬川は今の権現堂川筋を流れ、太日川と呼ばれて古利根川とは別の流路となった。元和7年(1621)利根川の豊富な水量の調節に苦勞した幕府は、流れの一部を他川に移すことを計画し、赤堀川の開削を行い鬼怒川の河筋に流した。寛永18年(1641)下総台地突出部―宝珠花村の北部・西金野井村―を開削して太日川を流した。この流路は江戸川と称された。承応3年(1654)連絡水路である赤堀川を拡張し、文化6年(1809)には約95mに拡幅し、利根の本流を鬼怒川水系に流すことに成功した。こうして中川流域の洪水はようやく人工的に調整され、安定した食料供給地として変貌した¹。

中川流域は、東に下総台地、西に大宮台地、南西に武蔵野台地に囲まれ、周囲の洪積台地に較べると一段低く、標高10メートル以下の低平な沖積低地帯である。ここは、古利根川が蛇行しながらほぼ中央を流れ、北北西から元荒川・綾瀬川が流路を複雑に変遷させながら流れる。北西からは荒川が入間川の



注 『越谷市史』(中川水系下流域の池沼跡地)より引用。

図1 中川下流域の沼沢地跡地分布図
(市史通史編 I 22 頁所収図 4)

河筋を流れ、さらに旧入間川の河筋には毛長川が流れ、中川に合流している。これらの河川は、洪積世にはひと続きであった洪積台地を削り、下総台地・大宮台地・武蔵野台地の各台地に分離し、日本でも屈指の沖積低地帯である中川低地・荒川低地を形成してきた。

＜荒川と大宮台地＞

大宮台地は、東は利根川によって下総台地と分離され、西は入間川・荒川によって比企丘陵・武蔵野台地と離され、北西から南東にかけて細長く島状に伸びる独立丘陵である。台地は北西部の鴻巣付近が最も高く標高30メートルであるが、これより南東は次第に低下し、大宮・浦和・鳩ヶ谷付近は約15~20メートルである。また台地北東部、元荒川の流路の西に沿う斜面は鴻巣―桶川付近の20メートル以上の

¹ 市史通史編 I, 20-21 頁

台地面より急に低下して15メートル以下になっている。この斜面の成因は河川の浸食、地殻の変動などが考えられる。沖積面との比高差はほとんどなく、ローム台地上に厚く中積土が堆積している。台地には無数の樹枝状の支谷が形成され、支谷は集まって大きな流れとなり、芝川・綾瀬川・元荒川に流れ出し、さらに荒川・中川に流れる。支谷の走行に注意すると流れは南ないし南東に向き、荒川・中川の流れの向きに近い。大宮台地は、支谷によって開析され複雑な地形を呈し、更に周囲は大河川が流れ、河川によって分断された台地間には中川低地をはじめ有数の低地帯が形成された²。

荒川は、大宮台地の東と西を流れる二流路で捉えられる。寛永6年(1629年)熊谷・久下地崎で瀬替えされる以前は、(1)大宮台地の東側を流れた元荒川が荒川的主流筋として流れていた。これは騎西低台地群と呼ばれる小台地群を大宮台地から分離し、さらに大宮台地を南東方に開析し、慈恩寺支台を切り離し、岩槻市東岩槻辺で中川低地に流れる。大宮台地東側は総じて台地と沖積地との比高差が小さく、台地から沖積地へなだらかに移行するが、これは荒川・利根川による氾濫土の堆積作用によるものと思われる。中川低地での流路は自然堤防の分布からいく筋の流路が見出されるが、最も太いのは岩槻市大野島付近で利根川と合して流れたもので、越谷市中島地先で中川に流れる。流路に沿って自然堤防の発達が顕著で、ここには古墳時代後期の見田方遺跡が営まれたことが確認されている³。

＜荒川低地と中川低地＞

大宮台地の西側を流れる荒川は、市野川・都幾川・越辺川・入間川など比企丘陵・外秩父山地から流れ出す河川を集めて南東流する大河である。このためひと続きであった台地を大きく開析し、大宮台地を武蔵野台地から独立させた。入間川が合流する以南は荒川低地と呼ばれ、中川低地とならぶ広範な

低地帯である。荒川低地を流れる流路は自然堤防の分布から二つの河道を見出すことができる。一つは、大宮台地に沿って流れたもので、自然堤防の分布を追うと、大宮市遊馬から浦和市田島にかけての右岸の発達が顕著である。これは台地と反対側に氾濫が繰り返された結果で、この流路は大宮台地の南端を流れ、川口市根岸で芝川、中川低地では伝右川・綾瀬川を合流して東流し中川に流れる。中川低地でのこの流路は毛長川と称され、自然堤防は流路の両岸に顕著である。自然堤防上には遺跡が連綿とつづき、特に毛長川両岸では顕著である⁴。



注 森川六郎氏作成『埼玉県平野部の地形分類図』による。

図2 大宮台地分布図
(市史通史編Ⅰ 18頁所収図3)

＜元荒川と古利根川＞

元荒川が中川に合流する越谷市中島から遡り自然堤防を追うと幅広な堤防が河筋に沿って伸びていることに気づく。これは中川の自然堤防と較べても遜色のないもので、岩槻市大野島まで続く。元荒川はここから慈恩寺支台を開析して遡るのだが、大野島からの自然堤防は慈恩寺支台に沿って春日部市中曽根・八木崎に伸びる。ここから自然堤防は左岸に顕著である。これは洪積台地に沿って流れた川が洪積台地とは反対側に氾濫を繰り返した結果と理解され

² 市史通史編Ⅰ, 18-19頁

³ 市史通史編Ⅰ, 103-104頁

⁴ 市史通史編Ⅰ, 104-105頁

る。この河筋は中世、武蔵国と下総国との国境であったことで知られる。右岸の慈恩寺・久喜・鷲宮などの地域が武蔵国の太田荘で、左岸が現在の元荒川と古利根川に画された粕壁・一ノ割・平方などの地域が下総国新方荘であった。この河筋が国境であったのは、利根川の本流がここを流れていたことを示す。15世紀に新方荘が下総から武蔵国に編入されるが、これは利根川の主流が古利根川に移ったことによる。このことは、中世以前の利根川が慈恩寺支台に沿って流れていたことを考えさせる⁵。

元荒川筋を流れた利根川は越谷市中島地先で大きく蛇行し、中川筋を南下する。しかし、三郷市戸ヶ崎に至ると再び蛇行し、八潮市・葛飾区飯塚を流れ、ここから大きく西流する。この西流した河筋は古隅田川と称され、葛飾区亀有・小菅を流れ、千住で荒川（入間川）を合わせて南流し東京湾に注ぐ⁶。

2 街道から考える

＜古代国制と駅伝制＞

大化改新の詔（645年）に示された地方制度は大宝律令（701年）によって全貌が明瞭になるが、養老令（718年）によってその内容を知ることができる。そこで国郡郷里の制度が確立する。

『延喜式』『和名抄類聚抄』によれば、武蔵国埼玉郡・足立郡・下総国葛飾郡の接するあたりが、現在の八潮市域や三郷市域にあたるとされる。江戸川（旧利根川・現在の市川市国府台には下総の国府と国分寺があった。武蔵国府と国分寺は多摩川沿いの府中大国魂神社を中心とするあたりに武蔵国府その北方の国分寺市西端に武蔵国分寺があり、この二つの大河に挟まれた地域が武蔵国ということになる。

古代の国制では、武蔵国府は多摩郡（現在の東京都府中市宮町）に、下総国府は、葛飾郡（千葉県市川市国府台）にあった。国の下部組織が郡であるが、国の国司同様に、郡にも郡司が置かれ、その政庁がそれぞれ国衙・郡衙である。郡衙の置かれた郷は郡

家郷と呼ばれたが、郡家郷がない郡も少なくない。そのような場合、郡名と同じ名の郷に郡衙が置かれる場合が多い。それに従えば、武蔵国埼玉郡衙は、同郡埼玉郡（行田市大字埼玉を中心として羽生市・北足立郡吹上町にわたる地域）、足立郡衙は同郡郡家郷（現在の大宮市一帯）にあったと思われる。また、下総国葛飾郡には郡家郷も葛飾郷もないが、群衙に付帯する施設である駅家の名を冠した駅家郷（千葉県松戸市付近）が、郡衙の置かれた地にあたると推定される⁷。

＜上の道・中の道・下の道＞

日光街道が整備される以前の八潮地方の街道事情はどうなっていたのだろうか。実は八潮地方における中世の主要道の一つとして、奥古道と下妻街道と呼ばれる鎌倉街道の支道があった。鎌倉街道は、鎌倉幕府の御家人らが鎌倉へ参集するための街道で、政治的・軍事的機能を持ち、物資の輸送の道として利用されたが、武蔵国からの道は、「上ノ道」「中ノ道」「下ノ道」と呼ばれていた。これらの道が後に鎌倉街道と呼ばれることになる。

「上ノ道」は上野・信濃に連絡する道で東山道へつながる、府中から恋ヶ窪・久米川・所沢・堀兼・女影・菅谷・藤岡・高崎・碓井峠に通じている。この「上ノ道」がいわゆる鎌倉街道の本道であり、府中から関戸・小野路・瀬谷・飯田・俣野を通して鎌倉へ向かうルートと府中から本町田・荏田・大船を通して鎌倉に至る2ルートがあった。

「中ノ道」（奥大道）は鎌倉から丸子・渋谷・中野・岩淵・鳩ヶ谷・岩附・高野渡・古河・宇都宮へ向かうルートであり、のちの日光街道（奥州街道）の古道と言える。当然府中から中野へつながるルートもできる。

「下ノ道」はのちの水戸街道の原型となるものであるが、鎌倉から大船・最戸・弘明寺・丸子・品川・住田・千住・松戸・土浦・石岡。水戸へと通じ

⁵ 市史通史編Ⅰ, 91-92頁

⁶ 市史通史編Ⅰ, 100頁

⁷ 市史通史編Ⅰ, 157頁

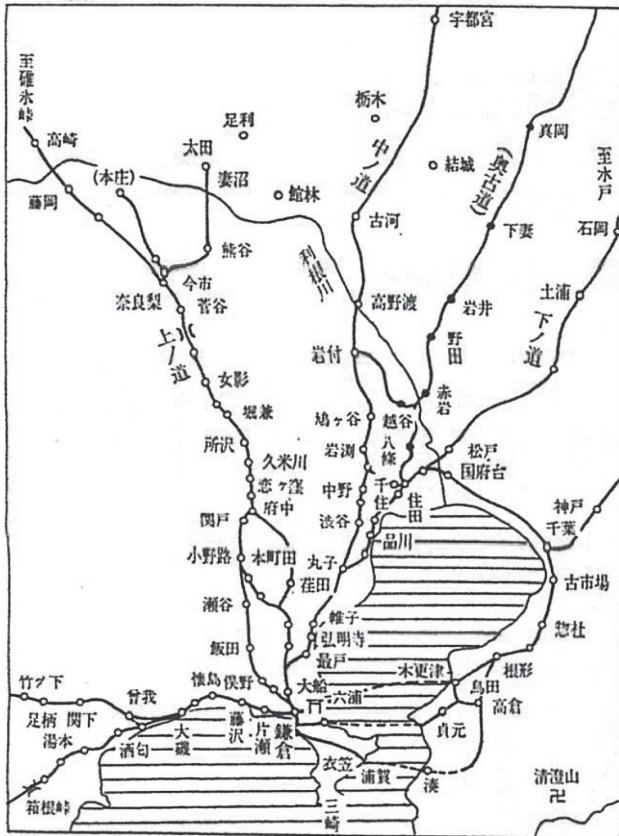


図3 上ノ道・中ノ道・下ノ道
(八潮市史通史編 I 25 頁所収図534)

ている。

「奥古道」「奥州海道」あるいは「下妻道」と呼ばれる道が八潮を通っている。この奥古道は、「下の道」の住田（隅田）と「中の道」岩淵（北区）と連絡する千住（足立区）から住田川（古隅田川・旧利根川）の右岸の自然古道を北上し、足立郡花又（足立区）に通じる道である。この道は花又から綾瀬川を渡河し、大曾根の関谷に至る。関谷から北上し、馬場・八條・柿木・四條・南百に至る。南百から越谷を経て岩付（岩槻）に至り「中ノ道」へ通じる道を「奥州海道」という。百度渡しで旧利根川を渡河し、吉川、金沢称名寺領の赤岩・内河を経て野田・岩井・下妻に通じるのである。この道を「奥古道」または「下妻道」または「下妻街道」という。一方、旧利根川（中川）の左岸の自然古道は「葛西道」と呼ばれる。この道は、葛西荘へ連絡する道で鎌倉街道の「下ノ道」に通じる。

中世においては、八潮市付近の中川（旧利根川）は潮の干満があり、海上を輸送する大型船が廻行で

きる北上の位置に所在するため、川関が多く分布し、特に大瀬付近は、上流からひらた船で輸送されてきた荷を、積み替える中継地＝問として発展したといわれる。「潮止」という言葉もその辺りの事情に由来し、中川流域の大瀬、古新田、堀、伊勢野のエリアが明治に「潮止村」という村名を採用し行政村を形成することになるのも納得できる。

千住から吉川までのルートを示すと、千住から五反野（三ツ家堀）から綾瀬川沿いに浮塚・大曾根・葛西用水・八條用水を超え鶴ヶ曾根から中川堤を北上し、柿木の渡しか木売の渡しで吉川側に移り、中川沿いにさらに北上し、前新田から深井新田の渡しで野田側に移る。八潮市域の中川沿いの土手の上を通して、吉川ないし越谷を経由して、利根川を渡し、赤岩・野田・下妻・真岡へ向かう、この下妻街道は、日光街道が整備される以前は江戸から北に向かう主要道であった。



図4 八條周辺の街道
(市史通史編 I 757 頁所収図78)

中川での船運が、渡しを別にして、どの程度の水準であったのか、気になるところである。かつて吉川の元荒川との合流点付近の木売あたりは、川上からの材木の中継地点として栄え、下流の木場が江戸の材木の集散地となるまでは、吉川が拠点であった

ということも十分に考えられる。鉄道が登場する以前は、大量輸送は川舟によるところが大きかったであろうから、利根川や江戸川と並んで、中川の水運の歴史にもっと光を当ててみる必要があるのではないだろうか。その点から八潮・吉川の歴史を掘り起こすことで新しい知見が得られるのではないだろうか。

＜古代の交通 東山道と東海道＞

地方制度の確立に伴い、京と地方の国府を結ぶ交通路も整備され駅制が実施されて、各地に駅が設置された。武蔵国は当初東山道に属していたため、国府へ至る道は上野国府（群馬県前橋市）から新田駅（群馬県太田市）を通り南下し、五駅をへて国府に達するものであった。一方、東海道に属していた下総国府への経路は、東海道を相模まで来て、三浦半島から海路富津（千葉県富津市）に渡り、上総国府を経て下総国に入り、二駅を経て国府に至るものであった。武蔵国と下総国は隣接しているにもかかわらず、このように東山道・東海道両道に分けて不便な経路を設定しなければならなかった。その背景には、両国の間に横たわる太日川（現江戸川）・住田川（現隅田川）の流域が未開発で、交通路を設けることが困難だったという状況が想定される。

しかし、こうした状況は次第に改められることになる。神護景雲2年（768年）3月には、東海道巡察使紀朝臣広名が、下総国の井上（イノカミ：市川）・浮島（隅田）・河曲の三駅と武蔵国の乗瀨（ノリヌマ：杉並の天沼か）・豊島（麴町旧江戸城あたりか）の二駅は、東海・東山両道の交通を受けて使節の往来が頻繁であるため、駅馬を10匹に増置したいと奏請して許可され、ついで宝亀2年（771年）10月、武蔵国は東山道から東海道に所属替えとなった⁸。

その理由は、武蔵国は東山道に属していたが、東海道からの連絡をもうけ公使の往来が激しく人民の負担は堪え難かった。それに東山道の駅路は上野か

ら下野へ入るには、上野国新田駅から下野国足利駅へ達すれば便利である。ところが武蔵国を経由するために大きく迂回し、新田駅から南下し五駅を経て武蔵国府に達した後、再び北上し下野国府へ向かっている。これに対し東海道は、相模国夷参駅（神奈川県海老名市）から四駅で下総国に達し往還の便が良い。そこで、武蔵国を東海道に編入しようというのである。（続日本紀）

また延暦24年（805年）10月には、下総国の鳥取（佐倉市）・山方（成田市）・真敷（香取郡大栄町）・荒海（成田市）の四駅が廃止され、下総の官道は大幅に改められることになった（日本後紀）。ついで承和2年（835年）6月、武蔵国と下総国の境を流れていた住田川（現在の隅田川）と下総国の太日川（現在の江戸川）の渡船が、従来の2艘から4艘に増加された。（累聚三代格）

この結果、京からの交通路は、相模国から武蔵に入り、店屋駅（まちや：町田市）で武蔵国府に向かう道に分け、小高（川崎市）・大井（品川区）・豊島の三駅を通して住田川（隅田川）を渡り、井上駅（市川）を経て太日川（真間入江）を渡って下総国府に至るようになった⁹。

3 神社の勢力分布から考える

中川流域を見ていて、興味深いのは、神社の分布である。中川より東は圧倒的に香取神社が支配的であり、綾瀬川より西は、氷川神社が支配的である。香取神社は下総国一宮であったことから、その末社は下総を中心に分布しているが、河西荘の風早郷や猿俣郷は現在の三郷や葛飾区を含む地域で、どちらも八潮に隣接する地域であり、香取神社の祭祀圏が八潮市に及んでいたことがわかる。香取神宮は、20年ごとの遷宮を行っており、香取本社とその末社の造営費用を賦役として祭祀圏より徴収していた。さらに、旧利根川の河川交通の発展に伴い、河関が設置される。文和元年（1352）に猿俣の関が設けられて以後、八潮市内の大堺・鶴ヶ曾根のほか、三郷市、

⁸ 市史通史編Ⅰ, 158頁

⁹ 市史通史編Ⅰ, 158-159頁

葛飾区、足立区の旧利根川流域に次々と関所が設けられ、香取神社の大禰宜家はこれらの関を灯油料所として私領化して、経済基盤の一つとしていた。

香取神社がこれらの関を拠り所とできたのは、旧利根川の河川輸送に携わる海夫の信仰の中に香取信仰が結びついていたことも指摘されている¹⁰。

武蔵一宮氷川神社は、足立郡を中心とする古くからの台地に散在しており、旧利根川流域では八潮市域以南にわずかに存在するのみでほとんど見られない。

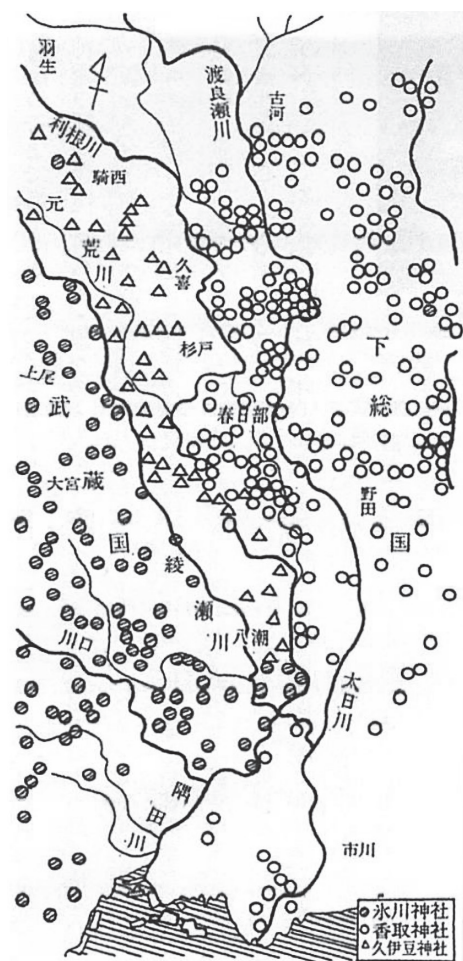
それに対して、久伊豆神社は、綾瀬川と中川に挟まれた中川低地つまり旧利根川流域の埼玉郡に密集して分布し、他地域ではほとんど見られない。有力な久伊豆社としては、越谷、岩槻の久伊豆社の他に、近世において騎西領48ヶ村の総鎮守であった騎西町場の久伊豆社（現玉敷神社）をあげることができる。利根川流域の埼玉郡の国魂信仰を引くものであり、この地方の産土神の性格が極めて強いものだと言われる。

久伊豆神社と並んで分布に特徴があるのが鷺宮神社である。鷺宮社の本社は久喜市の鷺宮にあり、関東最古の総社とされ、かつての太田荘各地に社があり、その最南端は、八潮市に隣接する花又（足立区花畑）の鷺宮神社である。

太田荘は、室町時代には、「太田六十六郷」と言われほど広大な荘園であった。その荘域は、古利根川以西で、現在の利根川以南の間にあるところと推測される。つまり北は埼玉県羽生市と埼玉県北埼玉郡北川辺町あたり、東は埼玉県南埼玉郡宮代町と同郡鷲宮町、西は埼玉県熊谷市・鴻巣市、南は埼玉県岩槻市・大宮市の間の範囲である。下河辺荘が水田中心の荘園であるのに対して、太田荘は畠中心の荘園であった。水捌けの悪い低湿地が多く、自然堤防上に集落と畠地とが立地し、その周辺に水田が存在していたことのようにであるが、低湿地における開発を進めるなかで治水と水田化が進められた。鎌倉幕

府の直轄領から北条の所領となり、さらに開発は進められ、その政策はのちに徳川家康にも引き継がれ、大々的な治水と新田開発そして街道の整備が行われることになる¹¹。

八潮市域のみならず、旧利根川流域に水神を祭るものが多いが、中世末からの新田開発に伴い洪水の害から村落を守るために水を祭り河川の氾濫を鎮めようという意図のもとに水神を祭るものが多いこともこの地域の歴史地理的な特徴を示していることとして興味深い¹²⁾。



注 西角井正慶『古代祭祀と文学』より引用作成。

図5 古利根川流域の祭神分布
(八潮市史通史Ⅰ 220頁図21)

¹⁰ 市史通史編Ⅰ, 223頁

¹¹ 市史通史編 I, 252-253 頁

¹² 市史通史編 I, 479-489 頁

4 条里—莊園—新田開発

(1) 八潮地方の条里制

条里制とは、古代における一町（60間＝約109m）方角の地割で行われた農地開発と土地制度のことである。東西・南北を道路や水路により1町方格に区切り、この一区画の土地を「坪」と呼び、6町四方の大区画を「里」と呼んだ。条理とは、7世紀の班田収授法に基づく農民支配の口分田のために区画され、条里制の施行された跡が条理遺構、条里制にともなう地名が条理遺構地名と呼ばれる¹³。

埼玉郡内では、中川（旧利根川）流域の八條条里（越谷—八潮）、下総国葛飾郡内では江戸川（旧太日川）流域の葛西条里（葛飾区）・二郷半条里（吉川—三郷）などがある。八條条里の遺構は、中世の八條郷、近世の八條領の地で、越谷市南部から草加市東部、八潮市にまたがる地にある。この八條条里は、旧利根川の自然堤防上から氾濫原にかけての海拔3－5メートルの地で、北は西方（越谷市）から南は小曾根（八潮市）にかけての元荒川・中川右岸の自然堤防より後背湿地にかけて遺構が確認されている。

地名に残るものとしては大相模村大字四條（越谷市）、八條村大字八條（八潮市）、増林村大字三丁野（越谷市）、出羽村大字四丁野（越谷市七左町：新越谷）、潮止村大字二丁目（八潮市）、桜井村大字間久里（越谷市）同大里（越谷市）などがあり、主として平野の田園部に位置しているが、その中でも大相模村四條、八條村八條は字名とともにその遺構も認められている¹⁴。

八條八幡神社付近の東西に連続する水田20枚の地積を、明治9年（1876年）の古地図から抽出してみると、約2町4反2畝11歩（7271坪）で、条里地積より71坪の歩伸びが認められ、また同年の地租

改正時の古番1-10番までの地積は、1町1反8畝4坪で、条里地積より56坪だけ少ない地積で、ほぼ条里地積に同程度の面積であるという極めて興味深い報告がなされている。このことは、1000年以上もの間、何度も水害その他の災害に遭いながらも、また政治支配と秩序の有為転変を喫しながらも、耕地の維持がほぼ同じ基準で継承されてきたことを暗示するものである¹⁵。

律令国家体制の基盤であった班田収授法はすでに7世紀前半頃から円滑に機能しなくなり、8世紀初頭には口分田の不足が顕在化し、養老6年（722年）には100万町歩の開墾計画を立てたが、それもうまくはいかず、養老7年（723年）には三世一身法、天平15年（743年）には墾田永世私財法を制定し、耕地の拡大に努めたが、結果は、有力貴族、寺社、豪族などによる土地の開発を促すことになり、かえって土地の私有化を促進することになった。こうした耕地拡大に際しては、開発者への納税免除特権が付与されていたため、耕地の拡大は朝廷の収入増には結びつかず、国家財政はますます苦しくなっていた。9世紀初頭からは各地に皇室の私有地である「勅旨田」を設け、国家財政の確保を図ったが、勅使田開発に駆り出された労働力は班田農民の労働力であり、開発の対象となった土地は、空闲地・荒地であったとはいえ、農民の共有地であったため、班田農民にとっては労働の負担増と生活基盤の喪失を意味した。勅旨田開発政策は公地公民制を自ら破壊するものでしかなかった。そうした中から莊園が発生することになる¹⁶。

(2) 莊園

初期の莊園は、その開発と経営は莊園の所有者が

¹³ 市史通史編Ⅰ, 159-160頁

¹⁴ 八條条里の条里制研究は、史料的には、栗原信充『玉石雜誌』（天保14年）が最初とされる。その後、埼玉県史跡調査会が昭和4年（1929）に調査し報告書『埼玉県史蹟名勝天然記念物調査報告第五輯』に纏められ、そのデータの一部が『埼玉県史』（1931年）に引用されている。戦後の研究成果として、三友国五郎「関東地方の条里」（『埼玉大学紀要8』1960）、野村康子「埼玉県越谷の条里」（『埼玉研究21』1971年）、遠藤忠「八条上杉氏」（『跡標1』1974年）らの指摘によって、その後市町村史や県史などで紹介されるようになった。（市史通史編Ⅰ, 161頁）

¹⁵ 市史通史編Ⅰ, 167-168頁

¹⁶ 市史通史編Ⅰ, 170-180頁

直接行い、そこに使用される労働力も公民の雇用によるものであったが、しだいに、有力な寺社や貴族層は、その政治力を利用して、自己の開発した墾田に対して、租税を納めない不輸権や国司の介入を拒否しうる不入権を有するようになった。そのため、在地の豪族たちは、国司の徴税から逃れるため、自己の開発した荘園を有力貴族や大寺社に寄進し、自らは荘官となって土地の実質的な所有権を確保するようになっていった。

八潮市域周辺と関連の深い荘園としては、武蔵国埼玉郡太田荘、埼玉郡大河戸御厨、下総国葛飾郡下河辺荘がある。太田荘は、現在の北埼玉郡の大部分と南埼玉郡の北部にまたがっており、下河辺荘は江戸川流域の埼玉（古利根川左岸の埼玉東部）・千葉（野田）・茨城（古河市・五霞町）の諸県にまたがっていたと考えられている。利根川東遷以前は、葛西用水・古利根川は、利根川の本流筋として機能し、この川を国境として、左岸側（栗橋地区と鷺宮地区の一部）が下総国下川辺荘、右岸側（久喜地区の一

部と鷲宮地区の一部）が武蔵国太田荘に属していた。太田荘と下河辺荘は共に鳥羽天皇の第三皇女八条院の所領であったが、鎌倉に幕府が開かれて以後は、金沢北条氏の領地となり、室町時代には、室町幕府の鎌倉府の直轄領となった。15世紀中期以降は鎌倉府がその拠点を鎌倉から下川辺荘内の古河（茨城）に移したことにより、下河辺荘は、関東の政治の中心となったが、その背景に下河辺荘が、鎌倉と東北を結ぶ鎌倉街道中道の陸上交通と利根川水系の水上交通が交差する交通・流通上の要衝の地であったということを見逃してはならないであろう。その後の中川・江戸川の水上交通・流通を考える上でも、重要な意味を持っているように思われる。

また大河戸御厨は、伊勢神宮領の御厨で、武蔵国の埼玉郡騎西領・足立郡淵江郷にまたがっていた。現在の北葛飾郡松伏町大川戸が遺称地とされ、その範囲は、現松伏町から越谷市にかけての古利根川一帯、吉川市、三郷市、八潮市、足立区北東部に及び、大河戸御厨内八条郷は八潮市大字八條付近を指すと



図6 古代期と室町期の利根川流路
(市史通史編Ⅰ 398頁図48・図49)

考えられている¹⁷。

こうした中世荘園経営の延長線上に江戸初期の河川改修と新田開発があると考えられる。

(3) 江戸期の河川改修と新田開発

八条領の村々は、近世初頭から武蔵国に属した。これは中世以来のことであるが、ただし、武蔵と下総との国境は中世にあっては利根川（現古利根川・中川）であったのが、近世に入ると利根川の東遷と江戸川の開削により武蔵と下総の国境は江戸川に移り、かつて下総国葛飾郡に属していた庄内領の一部・松伏領・二郷半領・東西葛西領の地域が武蔵国に編入された。その時期は江戸川が開削された後の寛永18年（1641年）とされている。幕府が編纂した正保年間（1644-48年）の絵図によっても、江戸川以西のかつての下総国葛飾郡の地域が、武蔵国葛飾郡に改められていることがわかる。これによって、武蔵国の東部沖積低地に位置する足立・埼玉・葛飾の三郡が一つの行政単位のもとに置かれ、治水灌漑事業や新田開発が円滑に展開されるようになった¹⁸。

また八潮地域の郡名は、徳川の支配に入ってから、天正18年（1590年）から元和・寛永期までは「騎西郡」、正保（1644-48年）頃から正徳元年（1711年）までは「埼玉郡」、正徳2年（1712年）以後は「埼玉郡」が使用されていたと考えられる。もっとも八条領の地域を「足立郡」と表記した文書もある¹⁹。近世に入ってから下総・武蔵の国界が古利根川から江戸川へ移っただけでなく、郡界にも変更があり、騎西（埼玉）・足立の郡界が綾瀬川に移ったとも考えられる²⁰。

関東郡代は、伊奈忠次とその子孫によって、天正18年（1590年）から寛政4年（1792年）まで世襲された。伊奈忠次は家康の関東入国後武蔵国足立郡小室（北足立郡伊奈町）や鴻巣などに1万石を与えられ諸侯に列し、代官頭とし関八州の民政を担当す

るとともに、市川・松戸・房川の関所を守り、のち甲斐国の代官も兼務した²¹。

天正18年（1590年）の武蔵・伊豆・下総三国から始まる徳川氏の直轄領に対する検地、家臣団に対する知行割、寺社領の寄進、利根川などの河川改修や備前堤・備前堀などの用水路の開鑿や瓦曾根溜井の開設、葛飾・埼玉・足立三郡の新田開発などに貢献し、武蔵や下総を見事な穀倉地帯に変えた。忠次は寺社や在地の有力者に新田開発を奨励し、功績のあったものに屋敷分を安堵したり年貢割付状を発給したりして帰順させた。

息子の伊奈忠治も、父忠次の事業を受け継ぎ、新田開発や河川改修を積極的に進めた。

一つは、武蔵国と下総国の国境地帯で、慶長・元和年間八条領周辺の葛飾郡茂田井新田（三郷）や三輪江新田（吉川）および足立郡の六木新田や大谷田新田。普賢寺三谷新田など、沼沢地の新田開発を進めた。またこの新田を水害から守り必要な用水を確保するために利根川（古利根川）水系の改修をはかり、元和7年（1622年）には武蔵国埼玉郡向川辺領左波村（大利根町）から古河川辺領本郷村（北川辺町）までの新川通りや、下総国葛飾郡川妻村（茨城県猿島郡五霞村）から同郡水海村（猿島郡総和町）までの赤堀川を開鑿した。さらに寛永12年（1635年）から同18年（1641年）にかけては赤堀川の拡幅、権現堂川の改修、江戸川の開鑿等を進め、承応3年（1654年）には利根川の東遷を実現した。

もう一つは、常陸国（茨城県）と下総国（茨城・千葉両県）の国境地帯で、元和末年新河道を掘って鬼怒川と小貝川を分離し、萱洗堰（山田沼堰）などを設け、寛永年間急速に新田開発を進めた。

さらに忠治は寛永6年（1629年）には武蔵国を流れる荒川を大里郡久下（熊谷市）で締め切り、新河道を造成して入間川の支流和田吉野川に付け替える工事を行った。これによって下流の新田、例えば

¹⁷ れきナビーやしお歴史事典 yashio-rekinavi.com/reki-navi/index.php?

¹⁸ 市史通史編Ⅰ, 539頁

¹⁹ 市史通史編Ⅰ, 541-542頁

²⁰ 市史通史編Ⅰ, 542頁

²¹ 市史通史編Ⅰ, 553頁

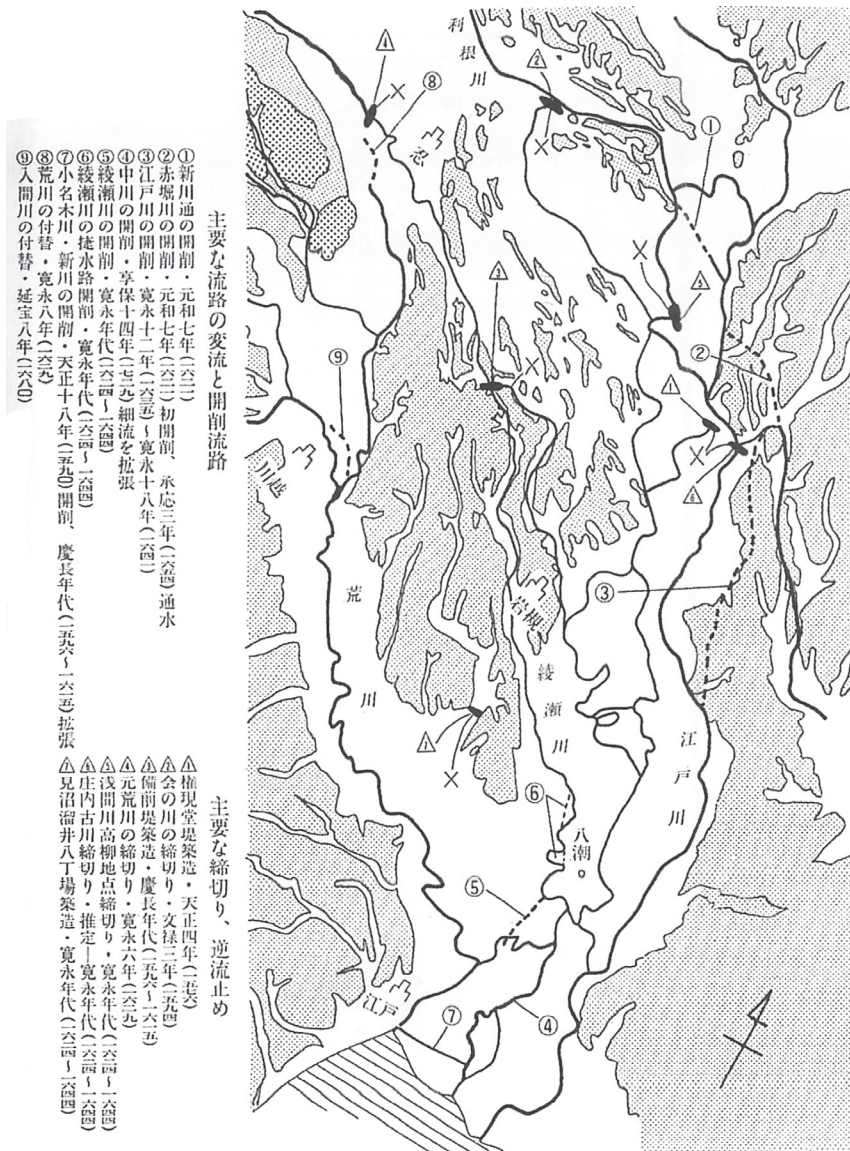


図7 利根川・荒川の改修
(市史通史編 I 772 頁所収 図79 利根川・荒川の改修)

越谷の出羽地区(槐戸新田・七左衛門新田・大間野新田)などが開発された。また、寛永年間には足立郡南部領の荒川を八丁堤(川口市・浦和市)で締め切り見沼溜井を造成し、下流域の新田開発を可能にした。

伊奈忠治の領地は、赤山領25ヶ村(川口市・草加市)、植田谷領3ヶ村(大宮市)都合28ヶ村7187石余であった。いずれも赤山陣屋周辺に一円分布する村々で、伊奈家領の中心であった。その半数の13ヶ村が伊奈氏自身によって開発奨励された新田

村であった。

忠治は赤山領7000石を宛てがわれたのを機に忠次時代の小室陣屋(北足立郡伊奈町)を引き払い、赤山(川口)へ陣屋を移した。それは、武蔵国東南部の直轄地における河川の改修や用水路の開鑿、新田開発の進展などに対応するためのものであったと言われる。葛飾郡のほぼ全域と埼玉・足立二郡の南半分が伊奈半十郎忠治の代官所として幕府の直轄地に属し、また、忠治の知行所と赤山陣屋はほぼその中央部に位置しており、直轄支配地の要衝であった²²。

²² 市史通史編 I, 562 頁

(4) 用水

今でも八潮市域の中心部を南北に二つの用水路が並行して流れている。葛西用水と八條用水である。葛西用水は、利根川の水を川俣から取水し（古くは綾瀬川から取水していたとされる。中世末、荒川の幹川であった綾瀬川は、圀村（八潮市）のところで利根川（現中川）と合流し、利根川の河床跡を流下していた。当時の中川は、綾瀬川の幹川で、葛西荘は綾瀬川からの水利権を有していた。）²³、各溜井を流れ、東葛西領・西葛西領等の10ヶ領、300余村、13万石を灌漑する大水路である。享保4年（1719）に上川俣から利根川の水を導水してから、それ以後は部分的な手直しだけであったという²⁴。

八條用水は、八條領の農業用灌漑に開削された用水堀で、その開削年は不詳となっている。中世の八條領内には、古利根川（中川）や綾瀬川、元荒川などからの灌漑用水路や排水路が開削され、この水利権を単位に共同村落が形成されていた。慶長初年の八條領内の荒廃湿地の開発により、湿地（溜井）からの取水灌漑ができなくなり、瓦曾根溜井から取水するようになった。そして中世からの各集落ごとの井堀に連結され近世の八條用水路が成立したものである。八條用水の水源は、古くは荒川（元荒川）の瓦曾根溜井からの取水であったが、後に、利根川の水も導水するようになった。

本所上水は、亀有上水とも呼ばれ、その水源は埼玉郡八條領瓦曾根溜井を水源とし、本所深川地区の飲用水路として、万治2年（1659）頃に開削された。上水堀は、葛西用水の東側を並行して流れていた。低地の上水路のため、渇水期には水が涸れ、大雨のときには田畑の濁水が流れ込み飲料水には適さなかったため、享保7年（1722）には上水を廃止され、享保15年（1730）に淵江領久左衛門新田から以南は葛西用水路として残し、以北の八條領内はすべて新田として再開発された²⁵。

ここまで、川と街道に着目して、八潮市域および

中川流域の自然地理的特性を見てきた。その特性は、八潮市のみならず、越谷、松伏、吉川、三郷にも共通する特徴であり、さらには春日部、杉戸、幸手、久喜に至るまでの地域全体を条件づけている特徴でもある。

結びにかえて

八潮市域の行政的編成過程と人口の推移

(1) 自然村から行政村へ

現在の八潮市の市域は、明治21年（1888）の市制・町村制によって成立した旧南埼玉郡の八條村（松の木村・伊草村・小作田村・八條村・立野堀村の連合（立野堀村は昭和31年に草加市に編入）、八幡村（上馬場村・中馬場村・大原村・大曾根村・浮塚村・西袋村・柳之宮村・南後谷村の連合）、潮止村（二丁目村・小曾根村・南川崎村・伊勢村・大瀬村・古新田・圀村の連合）の三村の形成にまで遡ることができる。昭和28年（1953）に町村合併促進法が公布されると、県も直ちに全県的な町村合併促進審議会を設置し、町村合併の積極的な実現方策樹立に関する答申を求め、町村合併に向けて動き出した。こうした情勢に呼応して、三村は、昭和31年（1956）に合併して、八潮村が誕生し、さらに昭和39年（1964）に町制を施行し八潮町となり、昭和47年（1972）には市制を施行し八潮市となる。八潮という村名の由来が、三村の八條、八幡、潮止の頭文字をとって命名されたものであることは容易に推測される。この時期の多くの市町村と同様に、55年体制と高度経済成長のもとで、村から町へさらには市へと成長したことが窺われる。特に八潮市は、高度経済成長のもとで、足立区、葛飾区などと隣接しており、戦後復興期に都区部の既存工業地帯が過密になるなか、比較的地価が安く、工業用水に恵まれた八潮や三郷市の南部に多くの中小企業が用地を求めてやってきた。現在でも八潮市は県内でも有数の製造業の中小企業集積地となっている。

²³ 市史通史編Ⅰ, 782頁

²⁴ 市史通史篇Ⅰ, 783頁

²⁵ 市史通史篇Ⅰ, 790-791頁

明治以降の人口変動を見ると、昭和30年頃までは、戦前からの延長線上にあり、それ以後の55年体制下での高度経済成長期に入ると急激に人口が増加することがわかる。昭和20年代は、敗戦直後の戦後復興期であるとはいえ、まだ生活様式・生活習俗・生活環境も戦前との連続性を色濃く保っていた。それらが高度経済成長と開発に伴う景観の変容とともに急激に変わり始めるのは、昭和35年(1960年)以降といえるであろう。その象徴的な年が、東京オリンピックが開かれた昭和39年(1964年)ということになる。

(2) 人口

明治9年(1876年)武蔵国郡村誌(八潮市史通史編Ⅱ 103頁 表31)によれば、八條村・八幡村・潮止村の人口は、八條村 2,633人 八幡村 2,411人 潮止村 2,657人 合計 7,701人であった。

明治21年(1888年)には八條村 2,943人 八幡村 2,675人 潮止村 2,886人 合計 8,504人であった。

第二次世界大戦後の戦後復興期、八潮村成立の4年前にあたる、1952年7月1日の住民登録人口データによれば、八條村 4,106人 八幡村 4,477人 潮止村 4,455人 合計 13,038人であった。

(八潮市史通史編Ⅱ, 885頁 表285)。

八潮村成立時の昭和31年(1956年)の人口が12,703人となっており、昭和27年(1952年)の三ヶ村合計人口より少ないのは、合併時に八幡村の立野堀が草加町に編入されたことによると考えられる(八潮市史通史編Ⅱ, 993頁 表327)。

三村合併後の八潮の人口の推移を見ていくと以下のようなになる。

昭和30年(1955年)	12,595人
(1956年 村制施行)	
昭和35年(1960年)	13,314人
昭和40年(1965年)	21,787人
(1964年 町制施行)	
昭和45年(1970年)	37,323人
(1972年 市制施行)	

昭和50年(1975年)	56,127人
昭和55年(1980年)	62,734人
昭和60年(1985年)	67,635人
平成2年(1990年)	72,473人
平成7年(1995年)	75,322人
平成12年(2000年)	74,954人
平成27年(2015年)	86,717人
令和2年(2020年)	93,363人

(総務省統計局国勢調査、埼玉統計年鑑、
八潮市史1056頁 表334 人口の変化)

八潮市周辺の埼玉地区にあっては、戦時中の草加市を除いて、敗戦前までは、埼玉県内でも人口の伸びの高い地域ではなかった。1960年代に入ると東武伊勢崎線沿線の草加、春日部に巨大な公団住宅団地が形成され、さらに武蔵野線開業に合わせて1970年代には三郷団地が形成され(その都度それぞれ「東洋一の規模の巨大団地」と呼ばれた。)、それによって草加、越谷、春日部、そして三郷の人口は急速に増加した。それに対して、八潮は、鉄道の沿線からも国道からも外れていたが、1970年以降人口増加の伸び率が上昇している。八潮市の昭和50年現在の人口総数は53,007人で、30,035人は他の地域からの転入者である。また人口増加のうち工業従事者数は、昭和30年(1955年)に1544人、昭和35年(1960年)に6942人、昭和40年(1965年)12,114人、昭和50年(1975年)13,478人に増えている。この間の人口増加の要因が中小工場の増加と工場従業員の増加、しかも外部からの転入という形で増加していることが見えてくる。八潮市の人口増加の要因が、巨大団地を抱えた東武伊勢崎線および武蔵野線沿線の各市とは異なっていることが見えてくる。したがって、平成に入ってから人口増加率の低減傾向は、周辺市の公団住宅居住者数のそれまでの増加傾向の頭打ちによるものとは原因を異にすると推測される。むしろバブル崩壊後の経済的低迷という経済的要因及びこの時期の湾岸エリア開発に伴う都心回帰現象に負うところが大きいのではないかと推測される。

三郷市は、1990年代に入ると人口は頭打ちの傾向となっていたが、平成17年（2005年）のつくばエクスプレスと三郷中央駅の開業によって、三郷中央エリアの開発が進み、かつ都心へのアクセスが一挙に改善されたことによって、再び人口増加を示すことになった。

また武蔵野線沿線には新三郷ららぽーと、吉川南駅、平成20年（2008年）開業の越谷レイクタウンとららぽーと開業によって、新越谷（南越谷）から三郷までが一つながりの生活ゾーンに変貌し、その利便性は一挙に上昇した。

平成13年（2001年）鳩ヶ谷市域で埼玉高速鉄道が開通してからは、平成17年（2005年）につくばエクスプレスが開通するまで、八潮市は、一時埼玉県下で唯一鉄道のない市となったが、つくばエクスプレス八潮駅開業後は、都心へのアクセスの良さによって、また駅周辺の住生活環境の整備に重点を絞った開発によって、エクスプレス沿線のうちでも流山おおたかの森駅につぐ人気を集めるようになっており、人口増加率の高い都市となっている。

振り返ってみると、1960年代から70年代にかけて貨物輸送が鉄道から高速道路を利用するトラック輸送へと変わるなかで、八潮市域の工業生産にとっては、その後常磐自動車道が開通し八潮インターができたこと、さらに東京外環自動車道が近くにできたことによって、工業団地からも容易にアクセスできるという点では、鉄道が市域内を走っていないということが、イメージされるほどにはハンディではなかったのではないかと推測される。また市域内にバス路線が縦横にネットワーク化され、それによって近隣の鉄道駅へのアクセスの便が良ければ、鉄道がないことの不便は最小化される。それでも2005年以後の急速な人口増加は、やはりつくばエクスプレスの開通と八潮駅誕生による都心への通勤の利便性の向上を証明しているようにも見える。しかし本当に便利になったと言えるのだろうか。通勤の利便性が高まったということだけで満足して終わって良いのだろうか。近隣で唯一町内に鉄道のない松伏町は、他の地域に見られないほど緑豊かな田園が広がってい

る。道路網とバス路線の充実と自家用車の普及によって、吉川、越谷、春日部、野田へのアクセスの良さは、生活に不便であるというほどのことはもはやあまりない。むしろかえって豊かさを温存しているようにさえ見える。

こうした視点も含めて、5市1町の戦後の生活環境の変化を比較考察していく。その過程で、戦後の八潮市を考える上で、そしてまたこの地域の各自治体を考える上で、いくつかの共通の論点が見えてくるであろう。

戦前の村行政において、特に地方改良運動は八潮にどのような改革をもたらしたのであろうか、医療精度や国民健康保険制度、そして福祉制度は、どのような設計思想のもとに、立ち上がったのか、戦後、甚大な被害をもたらしたカスリーン台風以後、行政としてどのような治水防災対策を打ち出したのか。1960年代の急速な工業化のなかで、環境汚染に対して、どのような対策を打ち出したのか。同時に1960年代以降の急速な人口増加のなかで、八潮市はどのような観点から都市計画を立案実施してきたのであろうか。それからすでに60年余りを経た現在、過去の経験から何を学び、今後に備えようとしているのか。次号では、こうした点を中心に、戦後の八潮村から八潮市への変貌と今後の展望と課題を検討する。

参考文献

- 杉田孝夫「ポスト・ベッドタウンシステムの条件 埼玉県三郷市を事例に」『ポスト・ベッドタウンシステムの研究』（雨宮昭一・福永文夫・獨協大学地域総合研究所編著、丸善プラネット、2013年）所収
- 杉田孝夫「川と街道から地域を考える（1）」獨協大学地域総合研究所編『地域総合研究』第17号、2024年
- 『八潮市史 通史編Ⅰ』八潮市史編さん委員会、1989年
- 『八潮市史 通史編Ⅱ』八潮市史編さん委員会、1989年
- 『令和5年版 統計やしお』八潮市役所、令和6年
- 『埼玉凹凸地図』昭文社、2022年
- 『千葉凹凸地図』昭文社、2022年
- 『東京23区凹凸地図』昭文社、2020年
- 『都市地図 越谷・吉川市・松伏町』昭文社、2024年